

平成 18 年卒業試験（第 2 回）

1. Biophysical profile scoring (BPS) の項目として 必要ない のはどれか。
 - a 胎児の呼吸様運動の観察
 - b ノンストレステスト
 - c 胎児の粗大運動の観察
 - d 胎児の眼球運動の観察
 - e 羊水量の測定

2. 羊水過多をきたす 可能性がない のはどれか。2つ選べ。
 - a 母体の糖尿病
 - b 胎児の十二指腸閉鎖
 - c 胎児の鎖肛
 - d 胎児の神経管開存症
 - e 母体の腎機能障害

3. 特発性血小板減少性紫斑病 (ITP) 合併妊娠と 関連がない のはどれか。
 - a 新生児の頭蓋内出血
 - b 分娩時の膈壁血腫
 - c 母体への大量ガンマグロブリン療法
 - d 母体へのステロイド投与
 - e 流産

4. 妊娠中のウイルス・細菌感染について正しいのはどれか。2つ選べ。
 - a 母体の膈培養で B 群溶血レンサ球菌 (GBS) が陽性の場合、分娩後新生児に抗生物質を投与する。
 - b 母体が HIV 陽性の場合、妊娠中に AZT を投与して帝王切開で分娩することが推奨されている。
 - c 母体が B 型肝炎ウイルスのキャリアである場合、分娩は帝王切開で行うことが推奨されている。
 - d 妊娠中に母体がパルボウイルス B19 感染をおこすと胎児が多血をきたして胎児水腫になることがある。
 - e 妊娠 38 週で母体が水痘を発症した場合には、塩酸リトドリンを投与する。

5. 胎児の循環について誤っているのはどれか。2つ選べ。
- a 臍静脈の酸素分圧のほうが、臍動脈よりも高い
 - b Botallo 動脈管が肺動脈と下行大動脈を短絡させている
 - c 卵円孔を介して左心房から右心房に血液が流れる
 - d 臍静脈は Arantius 静脈と肝分枝に分かれる
 - e 左右の外腸骨動脈から臍動脈が分枝する
6. 妊娠中の母体の生理で正しいのはどれか
- a 循環血漿量が増加するので血圧が上昇する
 - b 止血機能を高めるために血小板数が増加する
 - c 免疫能が低下するため白血球が減少する
 - d 尿路感染のリスクが高くなる
 - e 血中クレアチニン値が増加する
7. 切迫早産の診断と 関連しないのはどれか。
- a 子宮頸管長
 - b 頸管粘液中の癌胎児性フィブロネクチン
 - c Bishop スコアの上昇
 - d 母体血中 hPL
 - e 胎児の頻脈
8. 絨毛癌を強く示唆する因子はどれか。
- a 先行妊娠が、胞状奇胎
 - b 原発病巣が子宮体部
 - c 肺への転移
 - d 先行妊娠から 3 か月
 - e 脳への転移

9. 性の分化異常について正しいのはどれか。
- a 女性半陰陽としてアンドロゲン不応症がある
 - b Turner 症候群の治療には成長ホルモンを用いる
 - c Klinefelter 症候群の性染色体は、XY である。
 - d Swyer 症候群の性染色体は、XX である。
 - e 精巢性女性化症候群は、エストロゲン受容体の異常で発生する
10. 排卵時期を推定するのに 有用でないものはどれか。
- a 頸管粘液の羊歯状結晶
 - b 尿中 LH
 - c 経膈超音波検査による卵胞計測
 - d 血中プロゲステロン
 - e 頸管粘液の牽糸性の増加
11. 更年期障害を訴える女性の症状、所見として 正しくないのはどれか。
- a 骨粗鬆症
 - b のぼせ
 - c 高コレステロール血症
 - d FSH レベルの低下
 - e 抑うつ症状
12. クラミジア感染と 関連しないのはどれか。
- a 卵管性不妊
 - b 急性肝周囲炎
 - c 子宮外妊娠
 - d 胎児奇形
 - e 新生児肺炎

13. 常染色体異常と関連するのはどれか。2つ選べ。

- a 巨大児
- b 羊水過少
- c 流産
- d 胎児奇形
- e 肺低形成

14. 正しいのはどれか。

- a 子宮筋腫の診断には腹腔鏡検査が有用である
- b 子宮内膜症の確定診断として CA125 の測定が必要である
- c 最も過多月経の症状が出現しやすい子宮筋腫は、漿膜下筋腫である
- d 閉経後も子宮筋腫は増大する傾向にある
- e 子宮内膜症の治療に GnRH agonist を用いる場合、骨塩量に注意する必要がある

15. 正しいのはどれか。

- a 子宮頸癌の約 60%が扁平上皮癌で残りが腺癌である
- b 子宮頸癌Ⅲ期に対する治療の原則は広汎子宮全摘術である
- c 挙児希望がある子宮内膜異型増殖症に対する治療として MPA 療法を行う
- d 子宮体癌の好発年齢は 30~40 歳代である
- e 子宮体癌のリスク因子として経産婦、経口避妊薬がある

16. 子宮体癌の診断に 有用でないのはどれか。

- a コルポスコピー
- b 子宮内膜組織診
- c 骨盤 MRI 検査
- d 腹部骨盤 CT
- e ヒステロスコピー

17. 腫瘍の種類と腫瘍マーカーの組み合わせで 正しくない のはどれか。2つ選べ。
- a 卵巣粘液性腺癌—CA125
 - b Krukenberg 腫瘍—CEA
 - c 子宮頸部扁平上皮癌—SCC
 - d 卵黄嚢腫瘍—hCG
 - e 未熟奇形腫—AFP
18. 妊娠高血圧腎症（妊娠中毒症）の際の検査所見で正しくないのはどれか。2つ選べ。
- a AST 値、ALT 値の上昇
 - b 血小板数の増加
 - c ヘマトクリット値の増加
 - d BUN 値の増加
 - e FDP の減少
19. 前置胎盤と関連しないのはどれか。
- a 多産
 - b 多胎妊娠
 - c 妊娠高血圧症候群
 - d 胎位異常
 - e 癒着胎盤
20. 子宮奇形の診断に 有用でない 検査はどれか。
- a 子宮卵管造影検査
 - b ヒステロスコピー
 - c 尿路造影
 - d 骨盤 MRI
 - e コルポスコピー

21. 均衡型の子宮内発育遅延 (IUGR) を示すのはどれか。

- a 妊娠高血圧腎症
- b 風疹感染
- c 喫煙
- d 母体の腎疾患合併
- e 母体の糖尿病合併

22. 弛緩出血の リスク因子でないのはどれか。

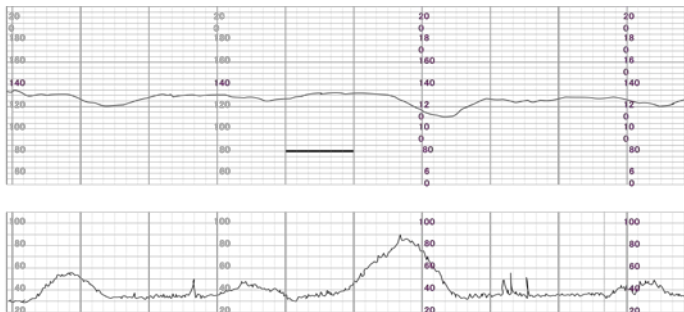
- a 子宮筋腫合併
- b 羊水過多
- c 双胎妊娠
- d 子宮内胎児発育遅延
- e 微弱陣痛

23. 胎盤における物質輸送で酸素と同様に移動するのはどれか。

- a ブドウ糖
- b アミノ酸
- c ガンマーグロブリン (IgG)
- d 水溶性ビタミン
- e 二酸化炭素

24. 次の文を読み、問いに答えよ。

38歳の初産婦。妊娠36週で自然陣痛初来のため入院した。非妊娠時から血圧が高いと言われており alpha-methyldopa を服用しており、妊娠中は収縮期血圧 126~136mmHg、拡張期血圧 72~88mmHg にて推移していた。蛋白尿は認めなかった。入院時の血圧は 128/82mmHg、蛋白尿は陰性であった。入院後、5時間での内診所見は、子宮口 7cm 開大、展退 80%で胎胞は膨隆していた。その後、しばらくして産婦は持続する腹痛を訴え始めた。性器出血は、入院時以来持続して微量であったが、増加することはなかった。産婦の体温は 37°C、血圧は 140/90mmHg、呼吸数は毎分 18 回であった。この時点での胎児心拍数-陣痛図（別紙2）を示す。



①最も考えられる診断は何か。

- a 羊水塞栓
- b 子宮破裂
- c 妊娠高血圧腎症
- d 絨毛膜羊膜炎
- e 常位胎盤早期剥離

②この時点で行うべき処置は何か。

- a 人工破膜
- b 経静脈的に塩酸リトドリンの投与
- c 経静脈的にオキシトシンの投与
- d 経静脈的に抗生剤の投与
- e 緊急帝王切開術

25. 37歳の初産婦。妊娠33週、胎動が少ないとの訴えで来院した。妊娠初期・中期の諸検査に異常は認めなかった。この日の血圧は150/85mmHg、尿蛋白(+)、尿糖(-)、下肢に軽度の浮腫を認めた。必要のない検査はどれか。

- a ノンストレステスト
- b 血算
- c 羊水量
- d 臍帯穿刺による胎児血酸素飽和度測定
- e 胎児推定体重

26. 21歳の女性。初経は12歳で月経は整であった。2か月前に妊娠9週で妊娠中絶術を施行した。術後、38℃台の発熱が1週間ほど持続した。その後、月経が再来しなくなったが、妊娠反応の陰性であった。診断に有用でないものはどれか。

- a Kaufmann療法
- b 子宮卵管造影
- c 超音波検査
- d 子宮ゾンデ診
- e 子宮鏡検査

27. 29歳の女性。結婚後、4年間の不妊のため、HMG-hCG療法にて排卵誘発を行い、AIHを行った。AIH後、30日後に腹部膨満を主訴に受診。妊娠反応陽性で超音波検査にて多量の腹水と左右卵巣がそれぞれ約10cm大に腫大していた。次に、行う必要のある検査を2つ選べ。

- a 胸部エックス線検査
- b 骨盤MRI検査
- c 卵巣腫瘍マーカーの測定
- d 血算
- e 血中hCG測定

28. 51歳の女性。2回経妊2回経産、健康診断で貧血を指摘され受診。Hb10.7g/dl、内診で子宮は、鵝卵大に腫大し、両側付属器には異常を認めず。経膈超音波検査で数個の筋層内筋腫を認めた。子宮頸部および体部の細胞診に異常を認めなかった。過多月経は軽度に認める。治療方針としてまず選択するのはどれか。

- a 子宮筋腫核出術
- b GnRH アゴニスト療法
- c 単純子宮全摘出術
- d 経口避妊薬
- e 鉄剤投与

29. 次の文を読み、問に答えよ。

30歳の女性。月経痛を主訴に来院。月経は、28日周期であるが、月経時には鎮痛剤の内服が必要である。内診にて、子宮は正常大で、ダグラス窩に腫瘤を触知し、子宮および腫瘤の可動性は不良であった。骨盤MRI写真（別紙7）を別に示す。

| |
|-------------------------------|
| 別 紙 T1:high, T2:high の卵巣腫瘍 |
|-------------------------------|

①最も考えられる疾患は何か。

- a 骨盤内膿瘍
- b 子宮内膜症
- c Krukenberg 腫瘍
- d 子宮腺筋症
- e 子宮筋腫

②治療法として選択しうるものを2つ選べ。

- a 単純子宮全摘術
- b 腹腔鏡下腫瘍摘出術
- c Kaufmann 療法
- d GnRH agonist 療法
- e 両側付属器摘出術

30. 21歳の女性。外陰部の疼痛を主訴に来院。診察にて外陰部に水泡と潰瘍形成を伴う病変を認めた。次のうち、正しくないものを2つ選べ。

- a HPV（ヒトパピローマウイルス）感染によるものである
- b 病変部の細胞診が有用である
- c この患者が今後妊娠した場合、分娩には帝王切開が必要である
- d 治療にはアシクロビルを用いる
- e 血清抗体価の測定が有用である

31. 32歳の初妊婦。既往歴に特記するものはない。家族歴では母親が糖尿病で治療を受けている。妊娠初期に行った糖尿病のスクリーニング検査は正常で、HbA1cも正常範囲であった。妊娠25週の際に再び行った糖尿病の検査で妊娠糖尿病と診断された。その後、食事療法で血糖値をコントロールしているが、空腹時血糖は90～100mg/dl、食後2時間の血糖値150～180mg/dlである。現在、妊娠32週、身長158cm、体重70kg（妊娠中の体重増加8kg）である。次のリスクのうち、この妊娠で上昇していないのはどれか。

- a 胎児奇形
- b 羊水過多
- c 巨大児
- d 新生児低カルシウム血症
- e 新生児高ビリルビン血症

32. 34歳の女性。不正出血を主訴に初診。月経は28日周期で整。軽度の月経痛と過多月経を訴える。子宮頸部細胞診がクラスⅢaであった。コルポスコピー（陰拡大鏡検査）写真を別に示す。まず次に行うべき処置、検査はどれか。

| |
|----------------|
| 別紙 モザイクと白色斑 |
|----------------|

- a 子宮腔部円錐切除術
- b 狙い組織診
- c 超音波検査
- d 骨盤MRI
- e 腫瘍マーカー（SCC）測定

33. 55歳の女性。帯下の増加を主訴に近医受診し、子宮頸部細胞診がクラスⅣであったため、当院紹介受診。当院での子宮頸部細胞診はクラスⅤで扁平上皮系の異常細胞を認めた。子宮体部細胞診は陰性。内診では子宮腔部は正常大、コルポスコピー（腔拡大鏡検査）の結果 SC junction は視認できず。可視領域には正常の扁平上皮のみを認めた。子宮頸管内キュレッタージ組織量微量のため診断できず。直腸診では傍腔組織への明らかな浸潤は認めなかった。まず次に行うべき処置、検査はどれか。

- a 子宮腔部円錐切除術
- b 狙い組織診
- c 腹部骨盤 CT
- d 骨盤 MRI
- e 腫瘍マーカー（SCC）測定

34. 39歳の女性。3回経妊3回経産。避妊方法の相談のために受診。血栓症のためワーファリン内服の既往がある。避妊方法として 適切でないのはどれか。

- a コンドーム
- b 子宮内器具（IUD）
- c 経口避妊薬
- d リズム法
- e 卵管結紮術

35. 次の文を読み、問に答えよ。

30歳の女性。結婚後、3年間の不妊を主訴に受診。身長156cm、体重69kg、軽度の多毛を伴い、基礎体温は一相性で月経不順および月経痛を認めた。内診で子宮は正常大、両側付属器は軽度腫大。パートナーの精液検査は正常であった。

①診断に有用な検査はどれか。2つ選べ。

- a LH、FSH の測定
- b 子宮内膜日付診
- c 経腔超音波検査
- d フーナー検査
- e 骨盤 MRI

②治療法として適切なものはどれか。2つ選べ。

- a GnRH agonist 療法
- b 低用量ピル
- c 人工授精
- d クロミフェン療法
- e 腹腔鏡検査

36. 30歳の女性。26歳、28歳、29歳のときに妊娠初期の流産の既往があり、受診。内診では子宮は正常大、両側付属器にも異常を認めなかった。必要のない検査はどれか。

- a 子宮卵管造影
- b 夫婦の染色体検査
- c 抗リン脂質抗体測定
- d 骨盤MRI
- e 甲状腺機能検査

37. 35歳の女性。双胎妊娠と切迫早産のために妊娠28週から安静入院し、塩酸リトドリンの投与を持続している。本日、妊娠33週4日で今朝から、左下肢に浮腫と熱感および疼痛を訴える。産婦の体温は36.5℃、血圧は120/75mmHg、呼吸数は毎分18回であった。胎児心拍数・陣痛図では特に異常を認めず。内診にて子宮口は2cm開大し、展退は30%。先進児は頭位で、超音波検査にて発育は両児とも正常であった。適切なのはどれか。

- a ワーファリン投与
- b ヘパリン投与
- c 安静解除
- d 帝王切開術
- e 利尿薬投与

38. 60歳の女性。2か月前からの不正性器出血を主訴に来院。身長155cm、体重60kg、血圧正常で特に合併症の既往はない。内診で膣分泌物は血性で子宮腔部に異常は認めず。子宮頸部細胞診は異常認めなかった。双合診で子宮はやや腫大しており、両側付属器は触知せず。直腸診にて傍膣組織は軟であった。診断に有用でない検査、処置は何か。
- a 子宮内膜組織診
 - b 腹部造影CT
 - c ヒステロスコピー
 - d 骨盤MRI
 - e 骨盤血管造影
39. 45歳の女性。腹部膨満感を主訴に来院。月経は28日周期で整。内診にて子宮は正常大、両側の付属器に過鶯卵大の充実性の腫瘤を触知し、超音波検査で腹水の貯留と両側の充実性の腫瘤を認めた。子宮頸部ならびに体部の細胞診には異常を認めなかった。診断に有用でない検査、処置は何か。
- a 上部消化管造影検査
 - b 腹部CT
 - c 腫瘍マーカー（CEA）の測定
 - d 骨盤血管造影
 - e 胸部エックス線検査
40. 17歳の女性。原発性無月経を主訴に来院。身長168cm、体重45kg、乳房の発育はあるが、恥毛はない。内診にて膣管は盲端に終わっている。診断に有用でない検査はどれか。
- a 染色体検査
 - b 血中LH測定
 - c 血中テストステロン測定
 - d 鼠径部の触診
 - e 知能検査

41. 29歳の女性。月経は不規則。無月経を主訴に来院し、妊娠反応陽性。最終月経起算で妊娠8週2日。内診にて帯下は白色、子宮はやや腫大し、両側付属器は触知しない。経膈超音波検査にて子宮内膜の肥厚は認めるが、胎嚢は認めず。両側付属器およびダグラス窩にも異常所見は認めない。有用な検査、処置はどれか。

- a ダグラス窩穿刺
- b 子宮内容清掃術
- c 胸部エックス線検査
- d 骨盤腹部CT
- e 血中hCG測定